

学位請求論文審査報告要旨

2017年3月8日

申請者 Pokrovska Olga

論文題目 中級日本語学習者の文章理解に見られる読み誤りの諸相
—ロシア語・ウクライナ語母語話者を対象に—

論文審査委員 石黒 圭
五味 政信
野田 尚史

1. 本論文の内容と構成

文章を理解するという行為は頭のなかで行われるため、目で見ることができない。日本語を学習する日本語学習者は、日本語の文章を理解する過程でさまざまな困難を覚えていると思われるが、産出過程を直接目にすることができる作文などとは異なり、その過程自体を目で見ることができないため、その困難が明確な形で取り出されることは、これまでほとんどなかった。

本論文は、日本語の文章を理解するときに学習者が覚える困難を、学習者の読み誤りに着眼し、学習者の母語をとおして見ることを試みたものである。学習者の読み誤りを丹念に収集し、それを細かく分類することで、学習者が文章理解の過程でどのような困難に直面しているか、その困難のタイプと広がりを見ることを可能にしている。また、学習者の母語をとおして日本語の理解を見ることで、目で直接見ることができない理解の姿を間接的に捉えうることを明らかにしている。

本論文は、全10章から構成され、その構成は以下の通りである。

第1章 序論

- 1.1. 本研究における読み誤りの定義、研究の前提と研究課題
- 1.2. 本論文の構成

第2章 先行研究における読み誤り

- 2.1. 母語話者の読み誤り
- 2.2. 第二言語学習者の読み誤り
- 2.3. 日本語学習者の読み誤り
- 2.4. 先行研究における読み誤りのまとめと本研究の位置づけ

第3章 研究方法

- 3.1. 調査概要

- 3.2. 中級日本語学習者を対象とした各調査
- 3.3. 母語話者を対象とした調査
- 第4章 ウクライナという教育現場：言語事情、教育環境、日本語教育事情と展望
 - 4.1. ウクライナにおける公用語、母語と使用言語
 - 4.2. ウクライナにおける外国語教育
 - 4.3. ウクライナにおける日本語教育事情（大学主専攻を中心に）
 - 4.4. ウクライナにおける日本語教育の問題点とニーズ
 - 4.5. ウクライナの日本語教育における読解指導の現状
 - 4.6. ウクライナという教育現場：本研究発展の可能性
- 第5章 文字認識レベルにおける読み誤り：語彙活性化のきっかけとカタカナの問題
 - 5.1. 文字列の読み誤りの抽出手続き
 - 5.2. 誤りのタイプ別分類
 - 5.3. 原文項目の表記別分類
 - 5.4. 音読における読み誤り：本章のまとめと今後の課題
- 第6章 文字列処理における誤り：分節上の問題
 - 6.1. 文字列の分節に関する先行研究の見解
 - 6.2. 分節問題の特定方法
 - 6.3. 分節問題につながる要因
 - 6.4. 分節を助けるには
 - 6.5. 分節における問題：本章のまとめと今後の課題
- 第7章 語彙レベルにおける読み誤り：キーワードの読み誤りが文章理解に及ぼす影響
 - 7.1. 読みにおける語彙の役割と語彙から派生する読み誤り
 - 7.2. 対象者らの語彙に対する認識について
 - 7.3. キーワードの読み誤りとその影響範囲：モノとメモ
 - 7.4. 語彙レベルにおける読み誤り：本章のまとめと今後の課題
- 第8章 文法レベルにおける読み誤り：「語り手」を示す一人称の省略復元プロセス
 - 8.1. 文法レベルにおける読み誤りとは
 - 8.2. 一人称動作主の読み取りに関する先行研究
 - 8.3. 分析の前提：課題文1における一人称省略と想定省略
 - 8.4. 「モノを捨てる」語り手の読み取り方：分析と考察
 - 8.5. 母語話者の評価インタビューからの示唆 92
 - 8.6. 文法レベルにおける読み誤り：本章のまとめと今後の課題
- 第9章 談話のレベルにおける読み誤り：接続表現が表す論理関係を読み取る際の問題
 - 9.1. 読解における接続表現の役割
 - 9.2. 分析の対象
 - 9.3. 対象者の読みにおける接続表現

9.4. 談話レベルにおける読み誤り：本章のまとめと今後の課題

第10章 総合考察

10.1. 本研究の結論

10.2. 残された課題

10.3. 最後に：読み誤りを研究すること

本論文のもとになった既発表論文

参考資料

参考文献

2. 本論文の概要

本論文は、ロシア語・ウクライナ語を母語とする中級日本語学習者の文章理解に見られる多様な読み誤りを詳細に記述し、それを質的に分析・考察をしたものである。以下、本論文の章立てにしたがい、各章の概要を順に紹介する。

第1章「序論」では、本論文が対象とする読み誤りの定義が示され、ウクライナで日本語を学ぶロシア語・ウクライナ語を母語とした中級学習者を対象に、読み誤りのきっかけとなりやすい要素を明らかにし、読み誤りが生じる過程を可視化するという本論文の目的が掲げられる。

第2章「先行研究における読み誤り」では、読み誤りを扱う先行研究が、母語話者、第二言語学習者、日本語学習者の三つに分けて概観され、そのうえで本研究の研究史上の位置づけと意義が示される。

第3章「研究方法」では、本研究の調査対象者であるウクライナ人大学生（ロシア語・ウクライナ語母語話者）の属性、読ませた文章の種類、口頭翻訳、筆記再生、フォローアップ・インタビューを用いた調査データの収集方法が示される。また、補助データとして、学習者の筆記再生を評価した母語話者による評価データについても併せて示される。

第4章「ウクライナという教育現場：言語事情、教育環境、日本語教育事情と展望」では、本研究の対象とするウクライナの学習者の十分な理解が、背景も含めて可能になるように、ウクライナの言語状況、外国語教育の位置づけ、日本語教育事情と問題点、そしてウクライナにおける日本語読解指導と学習者の意識について整理が行われる。

第5章「文字認識レベルにおける読み誤り：語彙活性化のきっかけとカタカナの問題」では、対象者の音読と課題文の文字情報と異なる部分が抽出され、文字認識と単語認知における読み誤りの分析が行われる。その結果、中級段階においても仮名の処理に問題が見られ、より日本語能力の低い学習者が未知語に遭遇した場合、「ぬ→め」「こ→い」などと、類似したひらがなを読み間違えることがある一方、カタカナ語においては、日本語能力に関係なく文字認識の訓練、「シェ」などのカタカナ特有の表記法、そして語彙としてのカタカナ語の知識が不足していることが明らかにされる。また、単語単位の読み誤りか

らは、「ゆきえ→行方」「していないから→していながら」など、類似した自立語や機能語が活性化されることも指摘される。

第6章「文字列処理における誤り：分節上の問題」では、文字列を適切に分節しながら読む能力は、読解全体の流暢さに関わっており、分ち書きをしない日本語では、母語話者は漢字を目で追って読む傾向があるため、表記の種類がある程度助けとなるものの、語彙知識が不十分な学習者にとっては文字列の分節が困難であることが示される。分節に失敗した対象者は、意味の抽出に集中するあまり、「抜き出す」の代わりに「抜き」や「抜き出」というように付属語を切り捨てて捉える、もしくは「ひと昔前→人々は昔」「みずから→～から」というように造語パターンや文法的構造を誤って捉えたりし、文字列の誤った分節をする傾向が見られる一方、分節に成功した対象者は、より豊富な言語知識を生かし、既知要素を効率よく切り捨てることで、未知要素の境目を正確に捉えている。このことから、語彙学習などの負担をかけずに学習者の分節能力を高めるために、造語パターンを意識した語彙導入や、理解を第一の目的としない文字列分節化の活動を取り入れることが有効であるという提案が行われる。

第7章「語彙レベルにおける読み誤り：キーワードの読み誤りが文章理解に及ぼす影響」では、語彙レベルの読み誤りが、語そのものの読み誤りと、語の読み誤りから派生する読み誤りに区別され、前者には多義語の意味選択失敗や意味推論の失敗などの先行研究が存在する一方、後者はほとんど研究されていないことに着眼し、文章全体の理解に影響を与える「キーワードの読み誤り」に注目した分析が行われている。課題文1には「モノ」というキーワードが8回繰り返し出ているが、これが、和語でありながらカタカナで表記されていることから「メモ」と認識されやすく、また「メモ」が、直近の文脈に馴染みやすかったことから、誤解に気づきにくかったことが指摘されている。対象者の中にはさらに、「メモ」を「メモリ」、つまり「記憶」として読み誤った者がいたため、その読みの過程を詳細に分析したところ、キーワードと共起する他の単語の意味を「メモリ」に合うように変え、それが成り立たない場合翻訳を放棄する、文章全体のテーマを誤解して誤った文脈を作り上げ、誤った文脈に合わせて誤った背景知識を想起させるなどの行為により、文章全体の理解が大きく崩れる様子が観察されたという。カタカナ語の読みにおいて英語の知識が負に働くことがあり、それがキーワードの場合は文章全体に影響が及ぶことに注意が必要であることが強調されている。

第8章「文法レベルにおける読み誤り：「語り手」を示す一人称の省略復元プロセス」では、文構造の不適切な解釈、文法項目の読み飛ばし、機能語の混乱などが文法レベルにおける読み誤りにつながるものとされ、多くの学習者にとって、母語に関わらず主語のない文が読み誤りの対象となりやすいことが指摘される。それは、動作主が想定されていない文で動作主が挿入されたり、実際に一人称省略が起きている文が一般論や総称的省略として捉えられたりするという形で現れており、こうした読み誤りは日本語母語話者にとって盲点となりやすいことに注意が喚起されている。とくに課題文1では、著者が自分の生

活を例にして語っている部分があり、8回のうち7回は「わたし」が省略されていたため、先行詞が直前の文脈にない5～8回目において、より日本語能力の低い学習者は、語り手ではない「一般者」を動作主として同定しており、その際、一人称省略が起きやすい構造に関する明示的知識があっても、「これは個人の話ではなくアドバイスである」などといった文章に対するイメージが優先され、一人称復元に失敗しやすかったとされる。一方で、動作主が想定されていない条件文などで語り手が動作主として挿入されることがあり、「主語のない文を見たら一人称省略だと思え」というストラテジーが負に働いていることが指摘される。

第9章「談話のレベルにおける読み誤り：接続表現が表す論理関係を読み取る際の問題」では、文章全体の意味を理解するのに、文章の構造を意識するなど、文の範囲を超えて情報を統合させるスキルが必要であり、その際には接続表現が重要であるはずが、接続表現の読み方に注目して対象者の読みを分析したところ、文間関係の理解において、接続表現よりも、前件と後件の解釈を基にした推論に頼る傾向があったという。すなわち、接続表現そのものの理解において、その意味が周りの文脈に合わせて揺れることがわかったという。並列関係を表し、ソ系の指示語を含む「それで」「そこで」などがもっとも揺れやすく、学習者の母語に相当する訳語がある「たとえば」や「とくに」はもっとも揺れにくかったと指摘されている。また、前後の内容が複雑であり、接続表現の意味的影響の及ぶ「機能領域」がはっきりしない場合、読みから欠落し無視されやすかったことも示される。

第10章「総合考察」では、それまでの分析・考察を踏まえ、①読み誤りは、ボトムアップ処理とトップダウン処理のバランスが崩れるときに生じる、②中級段階では、かなの処理に問題が見られる、③中級学習者の読みにおいて、とくに複数の語を含むひらがな列の場合、文字列分節の問題が生じる、④語彙レベルの読み誤りには、語そのものの読み誤りと、語の読み誤りに派生する読み誤りとがある、⑤文法レベルにおいて、主語のない文が読み誤りの対象となりやすい、⑥中級学習者は接続表現を重視しておらず、文間関係の理解においては、接続表現よりも、前件と後件の解釈に基づく推論に頼る傾向がある、⑦学習者が要素に重みを置く順位は、漢字を含む語、カタカナ語、ひらがな語（実質語・機能語含む）の順であるため、カタカナ語とひらがな語の意味確認がおろそかになり、読み誤りにつながる、という七つの結論が示されたのち、残された課題に言及される。

3. 本論文の成果と問題点

日本語学習者の文章理解過程に見られる読み誤りを扱ったものとして、本論文の成果は、大きくは次の3点にまとめられる。

第一は、方法論の斬新さである。脳内で行われる、日本語学習者の文章理解過程を観察するためには、観察対象を絞り込んで、可視化する方法を考える必要があるが、本論文では、観察対象を読み誤りに限定し、学習者の母語を介するという方法を用いて、日本語学習者の文章理解過程の困難点をあぶり出すことに成功している。これは、論文審査委員の

野田尚史氏が中心となっている研究プロジェクト以外では見られない斬新な方法であり、かつ、それとは独立して行われたものであり、今後の文章理解研究の新たな潮流を生み出す研究として高く評価できる。

第二はデータ整理の明快さである。独自の研究手法によって取り出された読み誤りを整理するときに、日本語学習者のボトムアップ処理を考慮して、「文字認識レベル」「文字列処理レベル」「語彙レベル」「文法レベル」「談話レベル」という五つのレベルで読み誤りを設定し、整理を行っている。こうした整理は、研究という面で、読み誤りという文章理解研究を進めるうえで明快な基準となると同時に、教育という面でも、読み誤りの傾向を知り、その改善を図るうえで適切な指針となりうると考えられる。

第三は観察眼の鋭さである。ウクライナで日本語教育を受け、同地で日本語指導を行ってきたロシア語母語話者としての経験を生かし、母語話者では見落としがちな興味深い考察を行っている。とりわけ、談話というものを意識したカタカナ語のキーワードの読み込み、主語の省略、接続詞の理解などは、日本語を母語とする教師では気づくことが困難な現象を発見し、データに基づいて実証的に明らかにしているため、ウクライナをはじめ、海外で日本語の読解教育に携わる母語話者日本語教師にとって実践的で、示唆に富んだ内容となっている。

このように優れた面を備えた本論文であるが、問題点もいくつか存在する。

第一は、量的な分析の不足である。もちろん、本研究は質的な分析を目指したものであり、その点では十分な水準を有するものであるが、調査対象者の人数が増えれば、読み誤りの傾向がより安定した形で捉えられるであろうし、異なる母語話者のデータがあれば、読み誤りが母語に由来するものか、学習者に共通するものかが明確になったであろう。

第二は、題目にもある「読み誤り」という術語である。「読み誤り」は先行研究でも伝統的に使われてきた用語で、それよりも適切な術語は想定しづらいが、本論文に見られる多様な現象を「読み誤り」という一語に抱え込みすぎているという面がある。少なくとも、「文字認識レベル」の読み誤りは、かならずしも意味の誤った理解につながらないという意味で、区別してもよかつたのではないだろうか。

第三は、第4章「ウクライナという教育現場」の位置づけである。ウクライナの教育現場の実態が詳細に描かれた章で、日本語教育事情の報告としては貴重なものであるが、ウクライナを研究のフィールドとして選んだ理由と直接つながっていない印象がある。この章がなかったとしても、本論文の価値は損なわれないと思われ、その意味で本論文を冗長にってしまった面がある。

しかし、上述の問題点は、本研究を一貫した質的研究として十全なものにしたいという筆者の立場から出てくる面もあり、本論文の示す豊かな学術的成果の価値を大きく損なうものではない。また、こうした問題点については、本論文の筆者にも十分な自覚があり、今後の研究の推進によって克服されることが期待される。

4. 結論

以上より、本論文が学位論文に値する優れた研究であることを認め、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考えます。

最終審査結果の要旨

論文審査委員 石黒 圭
五味 政信
野田 尚史

2017年1月31日、学位請求論文提出者、Pokrovska Olga 氏の論文「中級日本語学習者の文章理解に見られる読み誤りの諸相—ロシア語・ウクライナ語母語話者を対象に—」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、Pokrovska Olga 氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、Pokrovska Olga 氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有すると認定し、最終試験において合格と判定した。